

田原本町埋蔵文化財
調査年報
1996年度

6

1997

田原本町教育委員会

序

田原本町には唐古・鍵遺跡をはじめ、弥生時代から古代・中世・近世にかけての様々な遺跡が町の全域にわたって分布しています。しかし、これらの遺跡は住宅地や水田・畠となっているため、完全に保存されたものは少なく、正確な範囲や全容がほとんど明らかになってしまっています。町では、公共工事や民間の開発工事に際して発掘調査を実施し、少しずつではありますが、その成果を収めつつあります。

本書は平成8年度に町内で発掘調査を実施した遺跡の調査年報です。なかでも、唐古・鍵遺跡、清水風遺跡、八尾九原遺跡は近接した地域にある弥生遺跡で、いずれの遺跡からも類似する絵画土器が出土し、唐古・鍵遺跡と両遺跡との密接な関係がより明確になりました。また、唐古・鍵遺跡では、青銅器の鋳造に関連する鋳型が多数出土して、ここが銅鐸や銅鏡等、青銅器の生産拠点であったことが確実なものになってきました。このほか、平野氏陣屋跡では、中世土器を多量に検出するなど、貴重な資料を得ることができました。本書により、それぞれの地域の歴史について一層の関心を深めていただければ幸いです。

各調査には多くの方々のご指導・ご協力をいただきました。関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

奈良県田原本町教育委員会

教育長 岩井光男

目 次

I. 平成 8 年度の概要.....	1
II. 発掘調査の概要	
(1) 唐古・鍵遺跡 第60次調査	5
(2) 唐古・鍵遺跡 第61次調査	6
(3) 唐古・鍵遺跡 第62次調査	8
(4) 唐古・鍵遺跡 第63次調査	10
(5) 清水風遺跡 第2次調査	12
(6) 八尾九原遺跡 第1次調査	16
(7) 十六面・薬王寺遺跡 第13次調査	18
(8) 保津・宮古遺跡 第16次調査	19
(9) 保津・宮古遺跡 第17次調査	20
(10) 保津・宮古遺跡 第18次調査	21
(11) 黒田大塚古墳 第4次調査	24
(12) 小阪里中遺跡 第4次調査	26
(13) 矢部南遺跡 第1次調査	27
(14) 平野氏陣屋跡 第9次調査	28
III. 試掘調査・立会調査の概要	31

例 言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が1996年度（平成 8 年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第 2 表にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3. 本文に記載された遺構の記号については、SD が溝を、SK が土坑を、SR が流路を表す。
4. 遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した際の箱数で表す。
5. 本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』（木耳社）による。
6. 本文の執筆は各調査担当者があたり、編集は豆谷和之が行った。

I. 平成8年度の概要

1996年度に発掘調査を実施した件数は14件である。調査件数は94年度の7件、95年度の8件に比して倍増してはいるが、今年度は新規に職員が1名採用され、調査員3名体制がとられた。14件の発掘調査のうち、個人住宅あるいは農業用倉庫の建築に伴う国庫補助事業が6件、営利目的の開発に伴う受託事業が3件、公共事業が4件であった。なお、唐古・鍵遺跡第61次調査は、遺跡の性格把握・実態解明を目的として、国庫補助を受け実施した重要遺跡確認緊急調査事業である。

調査面積は、清水風遺跡第2次調査の604m²を最大に、最小は保津・宮古遺跡第17次調査の24m²であり、全国に比べ本町の調査面積は小規模なものである。しかし、唐古・鍵遺跡における遺物出土量は、コンテナ数にして第61次調査の500箱、第62次調査の150箱、第63次調査の250箱と、1m²当たり平均1～2箱を数える。また、遺構面も數面以上あり、遺構遺物の密度が非常に高いことなどを考えると調査のリスクは計り知れない。さらに、本年度調査の出土遺物のなかには重要なものも多く、新聞・テレビなどのマスコミを騒がせたことも記憶に新しい。特に、新聞一面を飾った清水風遺跡では、9月23日の現地説明会に約900人の見学者が訪れた。

これら成果が豊富な96年度を、各時代毎に順を追って概観する。

弥生時代 弥生遺跡では、唐古・鍵遺跡4件、清水風遺跡、八尾九原遺跡の各調査があり、重要な成果が得られた。重要遺跡確認緊急調査事業の唐古・鍵遺跡第61次調査は、青銅器土製鋳型外枠が出土した第3次調査地の西隣接地に調査区を設定し、溝から多くの青銅器鋳造関連遺物が出土した。これらの遺物によってほぼ土製鋳型外枠の全容が判明した。この他、第60次調査では集落の北東を区画する前期・中期の環濠を検出した。注目すべきは、布留期における環濠の再掘削で、本調査地の南東約100mの第27次調査でも同様な溝を検出している。これらは一連のものと想定されることから、布留期に再び、集落のまとまりを意識した区画がおこなわれていることが注目される。第62次調査では、集落の西を区画した中期後半から後期の環濠を検出した。第63次調査では、集落内部を区画する南北方向の大溝を検出した。この溝中には、鎧や鏡などの未成品を多数貯木していた。

清水風遺跡では、河川跡から多数の大和第IV様式の土器とともに、絵画土器約20点が出土した。特に、楯と戈をもつ人や大型建物などを並列的に描いた短頸壺は、その全容のわかるものとして弥生絵画を代表するものになろう。また、同時期の掘建柱建物を、河川跡の東側で2棟検出した。本遺跡が中期後半に出現し同時に廃絶する極めて短期的な集落であることが判明した。その他、前漢鏡と考えられる小型鏡片が、遺物包含層から出土している。

八尾九原遺跡は、今回の調査まで遺跡として認知されていなかった。方形の大型土坑から、多数の大和第IV様式の土器とともに、建物や魚などを描いた3点の絵画土器が出土した。遺構は中期後半のものしかなく、清水風遺跡と同様な性格をもつと考えられる。

弥生時代全般を通して継続する拠点集落の唐古・鍵遺跡と、その周辺の清水風遺跡などの断続的な集落を総括し、唐古・鍵遺跡群として把握していく新たな調査検討段階を迎えたといえる。

古墳時代 今年度は、町内の主要古墳群周辺での調査を行い、それぞれに成果を得ている。黒田大塚古墳第4次調査では、前方部正面の周濠底において、斜めに打ち込まれた木柱を検出した。笠形木製品あるいは鳥形木製品の支柱の可能性がある。小阪里中遺跡第4次調査では、溝内から埴輪や須恵器が出土しているが、この溝が古墳周濠になるかは定かではない。ただし、小阪里中1号墳の東隣接地であり、もう1基の埋没した古墳の周濠と考えることも可能である。八尾九原遺跡において、円墳の周濠と考えられる溝を検出し、須恵器の短頭壺が出土している。付近には笛鉢山1号墳、2号墳があり、これらとともに古墳時代後期の古墳群を形成すると考えられる。



田原本町の遺跡と発掘調査地点

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届 57条の2	発掘通知 57条の3		発掘	試掘	立会	計
1996年度 (平成8年度)	24	10	通知文 実施分	16 14	6	18 16	34 36

第2表 1996年度発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1 唐古・鍵	第60次	田原本町 唐古127-2他	田原本町	道路建設	1996. 11. 6 ~12. 26	509m ²	弥生・古墳	清水琢哉	建設課
2 唐古・鍵	第61次	田原本町鍵166	田原本町	重要遺跡 確認緊急 調査	1996. 11. 20 ~97. 3. 6	333m ²	弥生	藤田三郎 豆谷和之	国庫補助事業
3 唐古・鍵	第62次	田原本町鍵379	藤本輝雄	個人住宅 の建築	1997. 2. 19 ~3. 27	約 80m ²	弥生・中世	藤田	国庫補助事業
4 唐古・鍵	第63次	田原本町 鍵264-1	竹村 弘	農業用倉 庫の建築	1997. 2. 25 ~3. 31	約 120m ²	弥生	豆谷	国庫補助事業
5 清水風	第2次	田原本町 唐古373	南都レミ コンcre	バッターパ ラントの設	1996. 7. 4 ~10. 4	約 604m ²	弥生・古墳	藤田 豆谷	受託事業
6 八尾九原	第1次	田原本町八尾 221東隣接地	田原本町	農道整備	1996. 11. 13 ~12. 16	約 308m ²	弥生・古墳	豆谷	産業振興課
7 十六面・薬 王寺	第12次	田原本町 十六面165他	御衣如育代	個人住宅 の建築	1996. 5. 23 ~6. 10	75m ²	古代・中世	清水	国庫補助事業
8 保津・宮古	第16次	田原本町 宮古291	川嶋昭司	共同住宅 の建築	1996. 10. 16 ~11. 11	74m ²	中世・近世	清水	受託事業
9 保津・宮古	第17次	田原本町 宮古246	浅井井常盛	個人住宅 の建築	1996. 10. 21 ~10. 28	24m ²	中世・近世	豆谷	国庫補助事業
10 保津・宮古	第18次	田原本町 保津168 北隣接地他	田原本町	道路建設	1997. 3. 3 ~3. 22	176m ²	弥生・古墳 古代・中世	清水	建設課
11 黒田大塚古墳	第4次	田原本町 黒田368-4	東 神好	個人住宅 の建築	1996. 8. 12 ~8. 27	75m ²	古墳・中世 近世	藤田	国庫補助事業
12 小坂里中	第4次	田原本町 小坂217-1他	藤本佳伸	貸事務所 の建築	1996. 7. 10 ~7. 23	220m ²	古墳・中世	清水	受託事業
13 矢部南遺跡	第1次	田原本町 矢部382-1 西隣接地	田原本町	水路改修	1995. 11. 18 ~11. 25	660m ²	中世	豆谷	建設課
14 平野氏陣跡	第9次	田原本町 787-4	片岡良一	個人住宅 の建築	1997. 2. 25 ~3. 14	70m ²	中世・近世	藤田	国庫補助事業

古代 田原本町において、古代の遺構・遺物の検出例はさほど多くない。そのなかにあって、今回の保津・宮古遺跡第18次調査は特筆されよう。筋違（太子）道に交差すると考えられる東西方向の道路側溝を検出し、この側溝から人面墨書き土器や「富士」と書いた墨書き土器、円面鏡が出土した。本調査地は古代道の辻にあたると考えられ、祓えなどの祭祀が行われていたものと想定される。これらの遺構・遺物、そして宮古の地名から付近に古代官衙の存在が予想されよう。また、清水風遺跡第2次調査では、軒丸瓦1片と土馬1個体分を検出した。軒丸瓦は複弁蓮華文をもち、全体的に磨耗している。他に古代の遺物は検出しておらず、いかなる経緯で本地にもたらされたか明らかでない。

この他、十六面・薬王寺遺跡第13次調査では、7世紀前半の水田跡を検出している。

中・近世 今年度の中・近世の調査は、中世豪族居館あるいは中世寺院に関連した調査が4件あった。唐古・鎌遺跡第62次調査では、唐古南氏の居館に伴うと考えられる大溝を2条検出した。大溝は東西方向に走行し、居館内部を区画していたものと考えられる。鎌倉～室町時代の遺物が出土している。また、礎石をもつ柱穴を検出しており、建物があったと考えられる。

黒田大塚古墳第4次調査では、古墳周濠の埋土を切り込んで東西方向に走行する中世の大溝を検出した。この溝は、第1次調査で検出した古墳北側裾を東西に走行する中世大溝に連結するものと考えられる。また、東西方向に走行する近世の大溝も検出している。これは、第2次調査で検出した古墳南側裾を東西に走行する近世大溝に連結するものと考えられる。中・近世の大溝はいずれも法楽寺に関連した遺構であろう。

平野氏陣屋跡第9次調査において、室町時代の落ち込み状遺構を検出し、土師器小皿・瓦器碗の完形品約1000点が出土した。瓦なども出土しており、寺社に伴うものであろうと推定される。大半が、土師器小皿・瓦器碗であるが、日常雑器である羽釜やこね鉢を伴い、それらには搬入品も含まれることから、中世上器編年の一助となる資料である。

保津・宮古遺跡第16次、第17次調査では、廃寺「常楽寺」に伴う遺構・遺物の検出が期待されたが、それと断定できるものは認められなかった。ただし、第16次調査において東西方向の中世大溝を検出しており、これが寺域の区画溝になる可能性がある。

II. 発掘調査の概要

(1) 唐古・鍵遺跡 第60次調査

所 在 地 田原本町大字唐古127-2他

調査面積 509m²

調査原因 道路建設

担当者 清水琢哉

調査期間 961106~961226

遺物量 18箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。今回の調査地は集落の北東部分にあたり、これまでの調査により居住区の外側の環濠帯部分に相当することが予想された。

検出遺構 弥生時代前期の遺構としては、木器貯蔵穴1基、大溝3条がある。うち1条は環濠の可能性もある。調査区西側で検出された柱穴も前期が中心とみられる。

弥生時代中期の遺構としては、大溝7条、小溝2条がある。大溝のうち5条は環濠と考えられる。なお、調査区東側の大溝は粗砂で埋没していた。

弥生時代後期の明確な遺構は大溝1条のみであるが、河道の可能性も残る。

古墳時代には中期環濠の再掘削が行われたほか、後期の自然流路が2条検出された。

出土遺物 弥生時代前期では、SD-1201を中心として土器・石器が出土している。弥生時代中期～後期の遺物も出土しているが全体に少ない。

古墳時代前期の遺物はSD-1117、SD-1105などから出土している。布留型壺、小形丸底壺などがみられるほか、SD-1117では木製鞘、盤などが出土している。

まとめ 今回の調査では、集落北東部の様相を知る上で重要な成果があった。特に、弥生時代中期の環濠が数条巡る状況は、当初の予想通り調査地一帯が環濠帯であることを裏付けた。また、調査地西端付近は弥生時代前期には居住区として機能していたことも明らかとなつた。そして、布留期に再び居住区としての土地利用が行われたのであろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（東から）



3. SD-1117木製品出土状況

(2) 唐古・鍵遺跡 第61次調査

所在 地 田原本町大字鍵166

調査面積 333m²

調査原因 重要遺跡確認緊急調査

担当者 藤田三郎・豆谷和之

調査期間 961120~970306

遺物量 500箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万m²に達する。今回の調査地は、弥生集落の南地区にある。南地区は遺構の密度が高く、遺物も特殊なものが多い。特に、本調査地の東に隣接した第3次調査地では多数の青銅器鋳造関連遺物が出土しており、本調査地周辺に弥生時代の青銅器工房が存在した可能性が高い。

検出遺構 • 弥生時代前期~

中期前半: 溝6条以上、

土坑6基以上

• 弥生時代中期後半

~後期初頭: 溝10条、土坑20基、

柱穴多数

• 弥生時代後期後半: 溝5条、土坑6基

出土遺物 土製の鋳型外枠と推定される各種土製品、送風管などの青銅器鋳造関連遺物が出土している。特に、鉱滓の付着した高环状土製品は、これらの鋳造関連遺物が実際に使用されていたことを証明するものである。その他、銅鑑も2点出土している。また、特殊な遺物としては、中期前半の区画溝から出土した用途不明(窓枠状)木製品がある。

まとめ 今回は青銅器の鋳造工房跡を積極的に認める遺構は確認できなかった。しかし、鋳造に関する遺物は、第3次調査も含めると相当の量になる。このような特殊遺物は、唐古・鍵遺跡のどこでも出土するわけではない。もはや、本地周辺に青銅器の鋳造工房が計画的に配置されていたことは、疑いのない事実であろう。



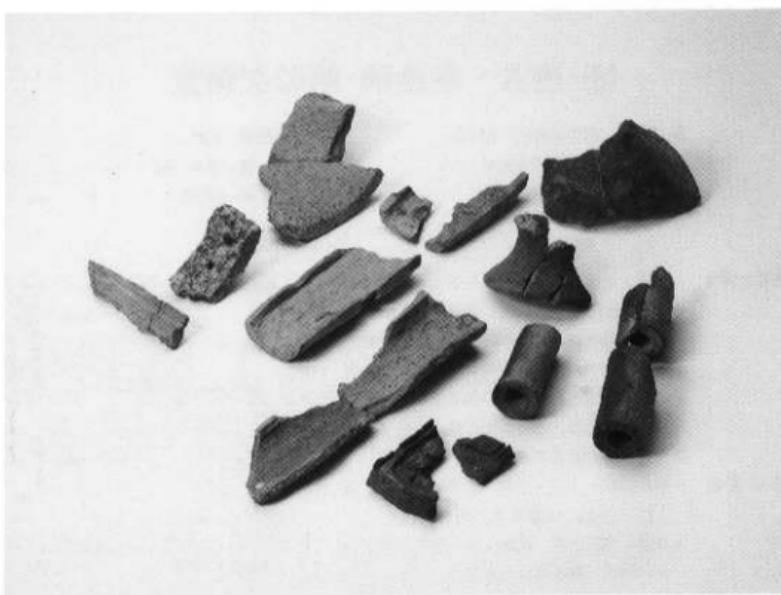
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地空中写真 (左が北)



3. 調査地全景 (北から)



多量に出土した 青銅器鋳造関連遺物

今回の調査で、特に注目されるのは鋳造関連遺物である。これらの遺物は、弥生時代後期初頭に属するもので、鋳型の外枠や送風管、高環状土製品（取瓶？）、被熱土器片などがある。弥生時代の鋳型の大半が石製品であるのに対し、唐古・鍵遺跡出土品はこれまでにない土製という技術的な特徴がみられる。この鋳型外枠は、内側に精製された粘土（真土）を貼り付け鋳型としたと考えるわけであるが、ことごとく真土は外れており、残念ながら作られた製品については断定できない。しかし、外枠の形態からできあがる鋳型は規制されており、真土の厚さを考慮すれば、ある程度作られた製品は推定できる。これらの鋳型外枠は、大きく6つに分類される。製作される青銅器は大小の銅鐸、銅戈や銅鎌などの武器類、鏡・劍などを候補にできるであろう。鋳型外枠は、今次の調査で40点以上あり、それ以前の調査分を合わせるとかなりの点数になる。このようなことから、唐古・鍵遺跡においては後期初頭の一時期に多量かつ多種類の青銅製品を鋳造していたことが想定できるようになった。

Colum

1

唐古・鍵遺跡
第61次

(3) 唐古・鍵遺跡 第62次調査

所 在 地 田原本町大字鍵379
調査原因 個人住宅の建築
調査期間 970219～970327

調査面積 約80m²
担当者 藤田三郎
遺 物 量 150箱

位置と環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。また、遺跡の西半では、弥生時代の集落跡と重複する形で、平安～室町時代にかけての唐古南氏と推定される居館が形成されている。今回の調査地は、これまでの調査で最も西にあたる部分の調査である。

検出遺構

- 弥生時代：土坑・小溝（前期）、大溝2条
土坑（中期）、大溝1条（後期）
- 鎌倉～室町時代：大溝2条、柱穴（礎石有）
- 江戸時代：桶を枠にした井戸

鎌倉～室町時代の大溝2条は、東西方向に走行し、調査区の北端（SD-51）と中央（SD-52）にある。SD-51は幅4m前後、SD-52は幅2.6m、深さ0.9mを測る。いずれも居館内部を区画する溝と考えられるが、SD-51の方が若干占いようである。

出土遺物 弥生後期のSD-101からは多量の土器・絵画土器・弥生後期の鉄片・柱材・モモ核が、中世の大溝からは瓦器、土師器小皿が出土。

まとめ 今回の調査は、遺跡の最西端に位置する。検出した遺構は、ほぼ2時期のものに限られる。一つは弥生時代のもので、中期後半から後期の大溝はムラを囲む環濠の一つになると考えられる。

中世の遺構は大溝と柱穴で、中世居館の内部であることを物語っている。しかしながら、時期は室町時代が中心であり、平安時代のものは少ない。居館が西側に拡張してきたことが考えられる。本地が遺跡の最西端と考えられていていたが、このような遺構の状況から、さらに西側に拡がることが予想される。



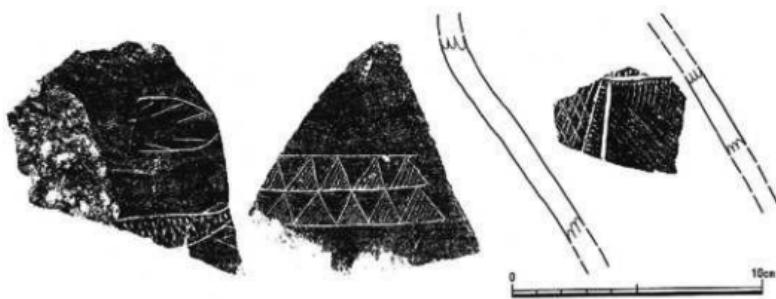
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（北から）



3. SD-101土器出土状況



ムラの西側を 囲む環濠

今回の調査地は、唐古・鍵遺跡の最も西端にあたる場所に位置する。本地で、ほぼ南北方向の大溝（SD-101）を検出したことで、これがムラを閉む環濠であることは、ほぼ確実であろう。溝幅は最大で幅2.6m、深さ1.4mを測る。ただし、唐古・鍵ムラの環濠が多重環濠であることから、今回の大溝がどれくらいの位置の環濠かは判断できない。しかし、掘削が大和第IV様式であること、環濠内に多量の遺物をもつこと、規模がそれほど大きくなないことから、本溝が大環濠（最も内側の環濠）と考えられず、大環濠から1～3本目の環濠と推定される。どちらかといえば、下層遺構の存在から居住区に近いと考えられる。

この大溝の下層からは多量の桃の種子・柱材・容器が、中層と上層からは多量の上器が、上層の大壺内からは水晶玉1点が出土した。時期は、下層が大和第IV・V様式、中層が大和第VI-1様式、上層は大和第VI-3様式である。

絵画土器 大壺の洞部上半に描かれた鹿と鋸歯文である。同一個体であるが、接合はない。両者の位置関係も不明であるが、土器表面の色調から、右側に鋸歯文、左側に鹿が描かれているようである。鹿は、内側に角枝をもつ大きな角と、斜格子と刺突で充填した洞部、突っ張った2本の前脚のみが残存している。鹿洞部に斜格子と刺突の両者をするのは類例がない。また、鋸歯文は上下2段で構成されている。SD-101の西側肩付近の第4・4-b層出土。他の1片は、建物と考えられるが小片のため不明である。第5層（下）出土。

Colum

②

唐古・鍵遺跡
第62次

(4) 唐古・鍵遺跡 第63次調査

所在 地 田原本町大字鍵264-1

調査面積 約120m²

調査原因 農業用倉庫の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 970225~970331

遺物量 250箱

位置・環境 今回の調査地は、唐古・鍵遺跡の南地区にあたる。近辺では過去に第33次、第44次、第49次、第52次との4件の調査が行われている。特に本調査地の東側で行われた第33次調査では、細形銅矛片1点、銅鐵3点の青銅器をはじめとして、玉類6点や木製の戈など特殊な遺物が出土している。このことから、南地区が唐古・鍵遺跡内において、極めて重要な位置を占めていたものと考えられる。

- 検出遺構**
- 弥生時代前期～中期前半：未掘
 - 弥生時代中期後半：溝1条、小溝1条、土坑1基、柱穴
 - 弥生時代後期～：溝1条、小溝1条、土坑2基、柱穴

出土遺物 調査区を南北にはしる弥生時代中期後半の溝SD-103Bから、多数の弥生土器が出土している。SD-103Bは一旦埋没し、後期初頭に再掘削される(SD-103A)。SD-103Aの中・上層からは弥生時代後期初頭の土器が多数出土した。また、その下層では、広鍬の未成品3点、組み合わせの鏟1点など、木製農具の未成品を検出した。弥生時代後期の土坑2基のうち、調査区東半中央で検出したSK-106の中層からは、壺形土器を主体とする完形品が15点まとめて出土した。

まとめ 本調査地は、唐古・鍵遺跡の南地区にあたり、遺構および遺物の密度が高い地域である。今回の調査においても、区画溝SD-103から多量の土器片が出土した。しかし、遺構の密度は比較的低く、南地区でもその中心をやや離れた北西部部分であろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. SD-103挖掘状況 (北東から)



3. SK-106土器出土状況



水浸けされた 木製農具未成品

SD-103Bは、調査区の中央やや西よりで検出した、幅約3m前後、深さ約1.2mの南北に走行する溝である。唐古・鍵遺跡南地区の内部を区画した溝と想定される。この溝は、弥生時代中期後半（大和第IV様式）には埋没してしまう。このSD-103Bの東肩に沿って再掘削された溝が、SD-103Aである。

SD-103Aは、幅約3.6m、深さ約0.8mの南北に走行する溝である。出土土器から、弥生時代後期初頭に掘削され、前半には埋没したと考えられる。下層からは、木製農具の未成品が多数検出されている。溝南側では数点の一木鋤が検出されたが、極めて保存状況が悪い。これに対し、溝北側では保存状況の良い、広鍬の未成品3点、組み合わせ鍬の未成品1点、板材が並んで検出された。板材も広鍬の原材と考えられ、切り離すことによって2点の未成品が確保できる。広鍬の未成品はいずれも、平行する側縁部が身の中央よりやや上で幅の狭い上端にむかって屈曲する形態である。身は削り出しておらず、隆起も孔もない。SD-103Aは、木製農具未成品の水浸けに利用されていたと考えられる。

Colum

3

唐古・鍵遺跡
第63次

(5) 清水風遺跡 第2次調査

所 在 地 田原本町大字唐古373

調査面積 約604m²

調査原因 バッチャープラントの建設

担 当 者 藤田三郎・豆谷和之

調査期間 960704~961004

遺 物 量 160箱

位置・環境 清水風遺跡は田原本町と天理市の境にあり、唐古・鍵遺跡の北方約600mに位置する。昭和61年度に櫛原考古学研究所が発掘調査を行なうまでは、遺跡として認知されていなかった。その第1次調査では、約30点の絵画土器が河川跡から出土し、唐古・鍵遺跡に次ぐ全国2番目の出土量を誇っている。手を挙げマントをひろげたシャーマンの臉は著名である。

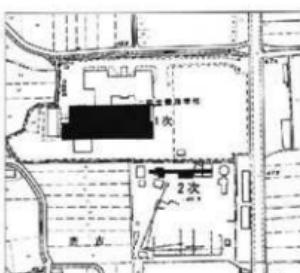
検出遺構 • 弥生時代中期後半：掘立柱建物2棟、
井戸2基、土坑2基、
河川跡2条

• 弥生時代後期後半：方形周溝墓2基、
土坑2基
• 古墳時代前期前半：土坑2基

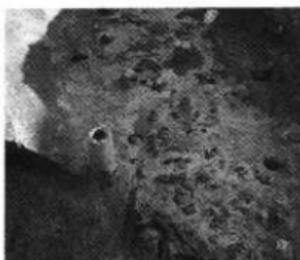
出土遺物 弥生時代中期後半の河川跡（SR-102）から、20点の絵画土器が出土している。特に、櫛と戈をもつ人、建物、鹿、魚を胸部に一巡させた短頸壺は今回の調査を代表する遺物である。絵画土器は、その他の遺構および包含層からも12点が出土しており、総計32点は清水風遺跡の特異性を示すものであろう。

また、特筆すべき遺物として、日光鏡系と考えられる前漢鏡（？）が出土している。ただし、弥生中期後半から庄内式までの土器を含んだ遺物包含層からの出土である。

まとめ 今回の調査においても第1次調査と同様に多数の絵画土器が出土した。遺物もさることながら、これらの絵画土器とほぼ同時期と考えられる掘立柱建物や土坑などの遺構を検出したことも大きな成果である。ただし、弥生時代中期後半という極めて短い期間に集落が営まれた可能性が高い。



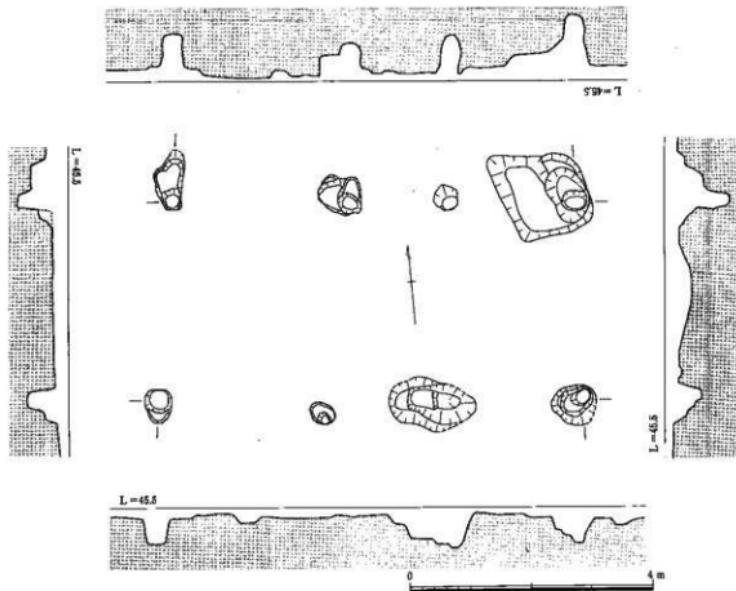
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. SR-102遺物出土状況（北から）



3. SB-101出土絵画土器



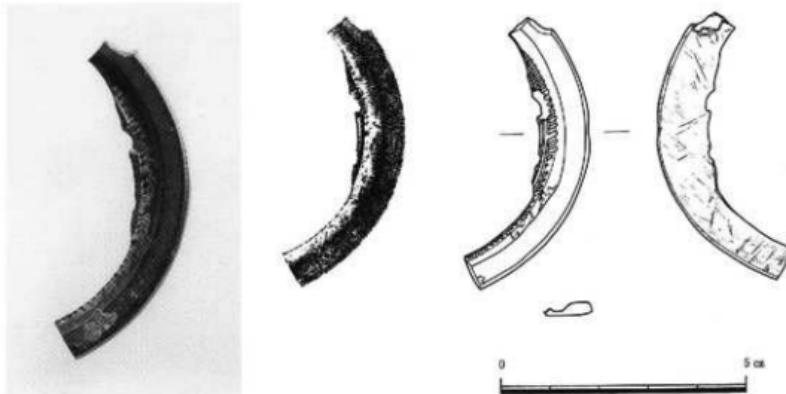
弥生時代中期後半の 掘立柱建物

S B-101は調査区のほぼ中央で検出した、3間×1間の掘立柱建物である。東西棟の建物であり、その主軸が真北に直交している。棟行約3.2m、桁行約7.0mを測る。面積は22.4m²である。桁行の柱間は、最大3.0mから最小1.7mまでの間隔があり、一定していない。柱根はすべて抜き取られ、柱穴の掘り方も原形を留めていない。8基の柱穴のうち、最も幅の狭いものから想定される掘り方は30cm前後であり、柱根の太さは20cm前後である。柱穴の深さは、遺構検出面から40~84cmであるが、この数値には抜き取り時の影響も考えられる。また、柱根を抜き取られた後の柱穴には、焼土塊や炭灰などと共に多数の土器片が投げ込まれていた。これらの土器片は、柱穴間での接合が可能である。出土土器片の型式から、柱根が弥生時代中期後半（大和第IV様式）には抜き取られていたと考えられる。なお、特筆すべき遺物として、棟の上に鳥のとまった建物の絵画土器がある。また、このS B-101の西側に隣接して、3間×1間の掘立柱建物S B-102がある。

Colum

4

清水風遺跡
第2次



弥生時代の 小型船載鏡片

鏡片は弥生時代中期後半と庄内式の土器を含む遺物包含層より出土した。鏡縁部分1/3の破片であり、鏡径6.7cmに復元できる。重量は8.08gである。鏡縁は4mmほどの幅をもち、その内側に幅2mmの櫛齒文帯が巡る。その特徴から、前漢の日光鏡ではないかと想定している。鏡縁端部は著しく摩耗する。しかし、破面を研磨した痕跡は認められない。銅質は良質で、表面は黒色を呈し、断面は銀色である。

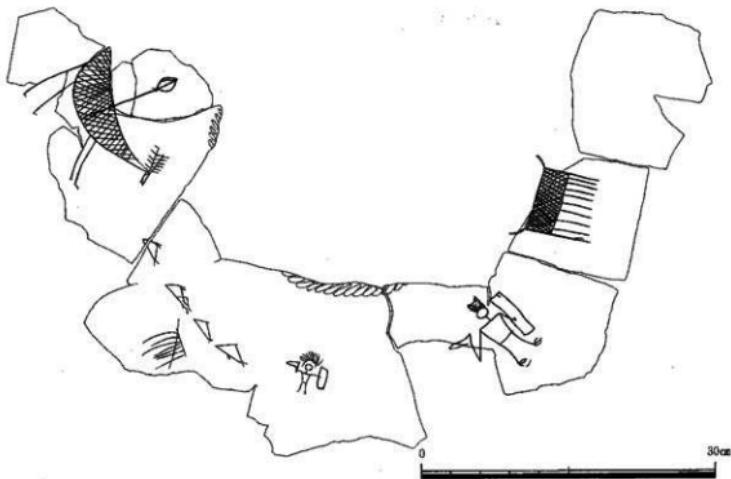
近畿地方からは、過去に2例の前漢鏡が出土している。大阪府大阪市瓜破北遺跡の精白鏡片(?)と、兵庫県神戸市森北町遺跡の重圓双銘帶式鏡片である。今回の清水風遺跡出土例を加え3例となつたわけであるが、他の2例が大型鏡であるのに対して、本例は日光鏡系の小型鏡である。また、他の2例が破面を研磨した破鏡であるのに対し、本例にはそれが認められない。從来、近畿地方出土の前漢鏡は、破鏡であることから庄内期に流入したと考えられてきた。しかし、近畿地方では弥生後期の段階に小型微製鏡を製作している。弥生時代中期後半には清水風遺跡に本鏡が持ち込まれていた可能性も考えられなくはない。

ただし、本鏡が出土した遺物包含層は、弥生時代中期から庄内式までの土器を含んでいる。また、出土地点の周辺には、弥生時代後期終末の方形周溝墓もあり、その入手時期には検討の余地がある。なお、本鏡を前漢鏡ではないという人もあり、その点についても問題が残されている。

Colum

5

清水風遺跡
第2次



楯と戈をもつ 弥生の戦士

この絵画土器は、約45点の破片に割れて河道から出土した。出土状況は、特別な状況を呈しておらず、他の土器片と同じように混在した状況で出土している。その散布範囲はおよそ10mで、上流（南）から流されたのが原因であるが、投棄はさほど離れた場所からではなさうである。

土器は、口縁部を欠失しているが、ほぼ胴部が全周し、全景のわかる壺である。復元すると胴部直径約38cmの壺（短頸壺？推定の高さ58.5cm）になる。この壺の胴部上半に建物・人物・魚・鹿が並列的に構成され描かれている。

この絵画土器は、絵画部分が全てわかる弥生土器絵画として数少ない資料である。これまで出土していた楯と戈をもつ人物に比べ具象的に表現し、戈の表現はリアル且つ着柄方向の知り得る資料となった。また、戈のみを表現した唐古・鍵遺跡の絵画土器（第50次調査出土）は、楯と戈を持つシャーマンを戈の表現をもって象徴化していると考えられる。絵画表現では、矢の刺さった鹿の体内までやじりを描いており注目される。

Colum

6

清水風遺跡
第2次

(6) 八尾九原遺跡 第1次調査

所 在 地 田原本町大字八尾221東隣接地

調査面積 約308m²

調査原因 農道整備

担当者 豆谷和之

調査期間 961113～961216

遺物量 20箱

位置・環境 八尾九原遺跡は現在の行政区分からすれば、三宅町と境を接した田原本町八尾の北端に所在する。今回の調査によって、弥生時代から古墳時代の複合遺跡として認知された。付近には、馬や人物などの形象埴輪を出土した筆鉢山古墳群がある。

検出遺構 • 弥生時代中期後半：溝3条、土坑5基、柱穴多数

• 古墳時代後期：古墳周濠

出土遺物 土坑（SK-201）から多数の弥生時代中期後半の土器が出土し、なかに3点の絵画土器が含まれていた。3点の絵画土器のうち、2点は画面がわかるもので、建物と魚である。特に建物は、渦巻きの棟飾りをもった高床建物であり、下向きの渦巻きは他に例をみない。古墳周濠からはほとんど遺物が出土しなかつたが、須恵器の短頸壺が完形で検出している。須恵器は6世紀後半のものと考えられる。

まとめ 八尾九原遺跡は今回が初めての調査である。その性格を明らかにするためには今後の調査を待たなければならないが、今回の調査によって、弥生時代中期後半という短期間に、集落が営まれていたことが判明した。この状況は、清水風遺跡とよく似ている。また、本遺跡から東方約900mに唐古・鍵遺跡が位置している。これらの3遺跡の絵画土器には、渦巻きの棟飾りをもった建物を描くという共通点がある。八尾九原遺跡も、清水風遺跡と同じく唐古・鍵遺跡の分村と想定される。他にも同様な集落が唐古・鍵遺跡の周囲を取り巻いていると考えられ、これらをひとつの遺跡群として把握していく必要がある。



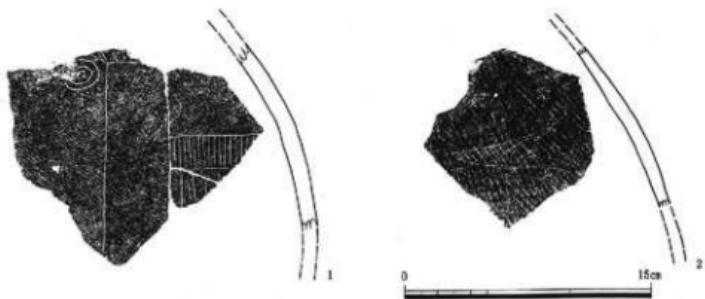
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SK-201完掘状況 (北西から)



渦巻き飾りが下を向く 新例の建物絵画土器

絵画土器が出土したのは、弥生時代中期後半の土坑（SK-201）からである。土坑は平面が長方形を呈し、長辺5.6m、短辺3.8mを測る。土坑の断面は逆台形で、深さは0.6mである。埋土の中層からは、ほぼ完形の器台や甌を含む弥生時代中期後半の土器片がまとまって出土した。その中に、建物と魚の絵画土器片が含まれていた。

建物 1は渦巻きの棟飾りをもつ高床式建物である。渦巻きの棟飾りは、棟から下向きに渦を巻いており類例はない。破片のため一部分の確認ではあるが、棟上に斜線があり、飾りの表現がなされていると考えられる。棟持柱は1本線による表現で、妻側からおおきく外に離れて描かれている。建物本体は向かって右側を欠くため全形は不明であるが、長方形で表現されていると考えられる。床部分の表現として、下端の線より上2cmに平行する横線をいれて建物本体の下部を区画し、その中に縦線を多数充填している。柱は現破片で5本の線まで確認することができ、柱表現が1本線あるいは2本線かでその本数は変わらが、それでも柱数の多い大型建物といえる。

魚 2は左や上向きの魚である。偏平な三角の胸部に斜格子文を充填している。左側辺は上端から突き出し、背鰭を表現する。尾鰭も、下辺と右側辺の2辺があわざることなく突き出すことによって表現している。下辺には二本の短線をつけており、胸鰓を表現しているのであろうか。斜格子文が胸部の輪郭から飛び出すなど、やや雑な部分もあるが、現在までに出土している絵画土器の魚の表現から逸脱するものではない。

(7) 十六面・薬王寺遺跡 第13次調査

所 在 地 田原本町大字十六面165他

調査面積 75m²

調査原因 個人住宅の建設

担当者 清水琢哉

調査期間 960523~960610

遺 物 量 8 箱

位置・環境 十六面・薬王寺遺跡は、標高47m前後の冲積地に立地する。これまでの調査により、弥生時代～古墳時代の集落、古代の水田、中世の豪族居館等が検出されている。過去の周辺の調査では古代の水田が検出されており、本調査地でも水田の広がりが確認されることが考えられていた。

検出遺構 第1遺構面では中世の井戸1基、土坑1基、素掘小溝が検出された。SK-01は13世紀後半ごろの井戸と考えられる。

第2遺構面では、8世紀後半ごろの西北西～東南東方向の斜行溝が2条、南北方向の流路状遺構2条、土坑6基、落ち込みが検出された。

第3遺構面では、水田4面とそれを区画する畦畔3条が検出された。水田面には人と牛の足跡が多数残されていた。水田面全体が暗褐色粗砂により埋没しており、洪水による埋没が考えられる。時期は不明。また、水田区画は第2遺構面の斜行溝の方向とほぼ一致しており、当時の自然地形によって土地区画がなされていたと考えられる。

出土遺物 今回の調査で出土した遺物には、瓦器・土師器・須恵器がある。第2遺構面の斜行溝からは完形の土師器環が出土している。平城京V期に位置づけられる。

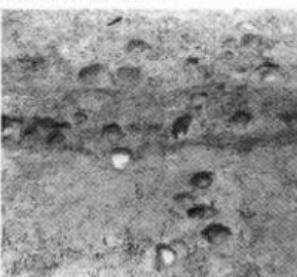
まとめ 今回の調査では、古代の水田遺構を検出することができた。周辺の調査でも水田は確認されているが、時期決定が難しいのが現状である。水田を覆う洪水層から飛鳥時代ごろの遺物が少量出土していることから、水田の時期もこの時代前後となる可能性がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景(東から)



3. 水田に残る足跡

(8) 保津・宮古遺跡 第16次調査

所 在 地 田原本町大字宮古291

調査面積 74m²

調査原因 共同住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 961016～961111

遺 物 量 18箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は標高約45～50mの冲積地に立地する。今回の調査地は現在の宮古集落の北東に位置し、遺跡の北東部にあたる。調査地の東には寺北、南東には寺垣内といふ小字名が残り、調査地南東を中心とする寺院の存在が推定されていること、調査地北側に隣接して春日神社が鎮座することなどから、寺院関連遺構の検出されることが予想された。

検出遺構 近世の遺構としては、南北方向の大溝が1条検出された。幅5m、深さ1.3m、溝の西肩には護岸用とみられる杭列・石列が検出されている。幕末に埋没したと考えられる。近世末～近代の上坑も2基検出されている。中世の遺構としては、幅3m、深さ0.6mの大溝1条が延長距離11mにわたって検出された。溝は東西方向であるが、若干西北西～東南東に傾いている。遺物より、13世紀末ごろと考えられる。このほか、中世大溝に切られた土坑が1基あるが、埋土から弥生時代の可能性がある。

出土遺物 遺物には、近世陶磁器、中世瓦器塊、若干の土師器と弥生土器などがある。中世大溝からは石製鏡が出土している。全体形は梢円である。

まとめ 今回の調査では、近世・中世の遺構が濃密に分布することが確認された。特に、中世大溝は調査地南東を中心に存在したことが推定される「常楽寺」関連の遺構とも考えられるため、寺域を推定する上で重要である。

今回の調査では弥生時代末～古墳時代前期の遺物が散布していたが、明確な遺構を検出することはできなかった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. 杭列検出状況 (北から)

(9) 保津・宮古遺跡 第17次調査

所 在 地 田原本町大字宮古246

調査面積 24m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 961021~961028

遺 物 量 5 箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は、田原本町大字保津および宮古に所在する遺跡である。過去、16次におよぶ発掘調査がおこなわれ、縄文時代後期～中世にわたる各時代の遺構・遺物が検出されている。今回の調査地は宮古集落の東北部にあたり、小字名を「寺西」という。調査地東側には平安時代の薬師如来座像を祀った薬師堂がある。これを中心として付近一帯には寺に関連する小字名が多数残されており、本地もその一つである。これらの小字名から、廢寺「常楽寺」の存在が推定されている。

検出遺構 • 中世：溝1条、土坑1基、溜め池状遺構1
• 近世：溝2条

出土遺物 調査区のほぼ全面で検出した溜め池状遺構（SX-21）からは、土師質の羽釜や瓦質土器など、16世紀前半の上器が出土している。溜め池状遺構（SX-21）によって削平を受けた溝（SD-31）からは、瓦器塊1点が完全形で出土している。瓦器塊は、その形態から13世紀末頃のものと考えられる。本調査区において、最も古い遺構は、南東端で検出した土坑（SK-41）である。最下層から12世紀末頃の瓦器塊が出土している。

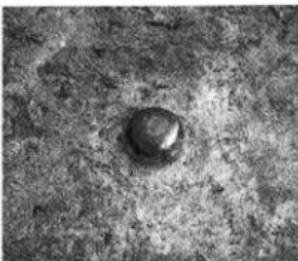
まとめ 今回の調査では、調査地のほぼ全域に広がる中世末の溜め池状遺構（SX-21）を検出した。溜め池状遺構は、調査区外に広がるため規模、形態は明らかではない。また、溜め池状遺構によって、他の遺構のほとんどは、削平されていた。当初検出が期待された「常楽寺」の遺構も、溜め池状遺構によって、その有無は不明である。ただし、出土した遺物に瓦などの寺院に関連したものはなかった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SD-31瓦器塊出土状況

(10) 保津・宮古遺跡 第18次調査

所 在 地 田原本町大字保津168北隣接地他

調査面積 176m²

調査原因 道路建設

担当者 清水琢哉

調査期間 970303～970322

遺物量 20箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は標高45～50mの沖積地に立地する。これまでの調査で、縄文時代後期～中世の遺構が検出されている。今回の調査地は遺跡の南西部にあたり、南東隣接地で行われた第14次調査では筋道連関連の遺構を検出しており、本調査でもこれに関連する遺構が検出されることが考えられた。

検出遺構 弥生時代の遺構は、土坑7基、溝2条がある。多くの遺構は上半がSD-101により失われている。時期は、後期後半を中心であるが、弥生時代前期の土坑も1基検出された。

古代の遺構には、土坑3基、溝7条がある。最も大きな遺構SD-101については後述する。SD-107は奈良時代ごろの北北西～南東方向の溝で、現存幅0.3m、現存深度0.1mである。筋道と方向が一致している。

出土遺物 遺物の大半がSD-101のもので、7～8世紀の土師器・須恵器が出土している。特に人面墨書き土器の出土は注目される。また、土馬小破片、須恵器円面鏡もSD-101直上の包含層から各1点出土している。SD-101掘削直前とみられる遺構SD-107でも円面鏡が出土している。

まとめ 今回の調査では、古代の交通路を復元する上で重要な遺構が検出された。また、人面墨書き土器の出土は本町初である。このほか、弥生時代後期集落の拡張よりも確認できた。弥生時代前期の遺構・遺物も検出されたが、集落からは若干離れた場所に相当するようである。



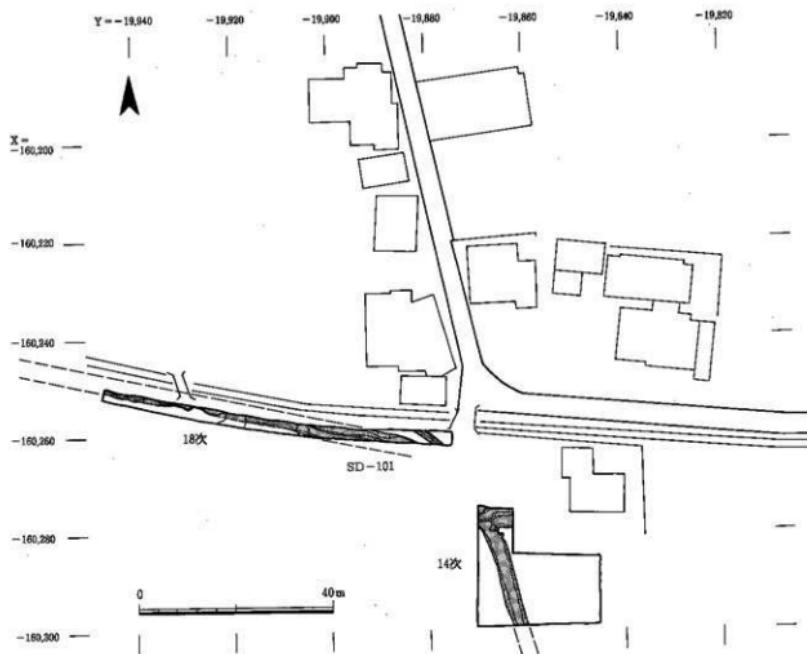
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（西から）



3. 調査地全景（東から）



「筋違道」に交差する 古代道路

SD-101は、西北西一東南東の細長いトレンチとほぼ同じ方向に走向する溝である。トレンチ東半では北肩が、トレンチ西半では南肩が検出された。溝の推定幅3.5m、深さ0.4mをはかる。溝中より人面墨書き土器5点、「富女」という人名を記した墨書き土器1点が出土した。時期は、8世紀後半～末ごとと考えられる。

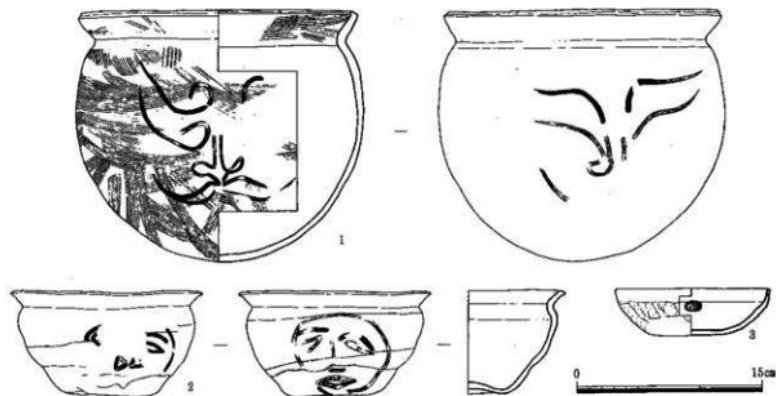
現在、大字阪手と宮古の間を西北西一南南東方向の道路が通るが、この道路周辺で検出される古代の素掘小溝の多くがこの道路とほぼ方向が一致することが判明している。このような周囲での状況証拠から、今回検出された西北西一東南東方向の溝が西北西一東南東方向の道路の南側側溝であった可能性は高い。

東側で行われた第14次調査では、北北西一南南東方向の道路「筋違道」の西側側溝とみられる溝も見つかっており、調査地の東側付近が交通の分岐点となっていた可能性が考えられる。

Colum

8

保津・宮古遺跡
第18次



ちまた 「巷」に棄てられた 人面墨書土器

古代の溝SD-101上層からは、8世紀後半の墨書土器・人面墨書土器などが出土した。

1は土師器壺で、ほぼ球形の体部に短く内湾気味に立ち上がるくの字状の口縁をもつ。人面墨書きがみられるのは2ヶ所である。人面墨書の1つは目と眉を渦巻き状に表現している。もう1つは眉を逆八の字状に表現している。

2は土師器の「壺B」といわれるものである。底部付近を型でつくり、それを土台に粘土紐巻き上げによって胴部が形成される。体部全体に接合痕が明瞭に残る。人面墨書きは2ヶ所で認められるが、土器全体に鉄分が付着していることもあり墨痕の残存状況は悪い。

3は土師器壺である。内面の口縁付近に小さな剥離があり、それを囲むように墨書きによる○印が描かれていた。

今回の調査では、SD-101で人面墨書き土器による祭祀が執り行われたことが判明した。人面墨書き土器は、平城京東堀川、長岡京条坊交差点、下ッ道と河道の交差する橋の付近などでまとまって見つかっており、都城付近の主要交通路に接した河や溝に流されることが多かったようである。人形や土馬・斎串等は祓えに使用される祭祀具と考えられるが、民俗例によると祓えの場となるのは道の交差点、すなわち「巷」である場合が多いといふ。第14次調査でも土馬や斎串が出土しており、調査地付近が巷すなわち交差点のような性格の場所だった可能性は高まつたといえる。

Colum

9

(1) 黒田大塚古墳 第4次調査

所在地 田原本町大字黒田358-4

調査面積 75m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 藤田三郎

調査期間 960612~960627

遺物量 30箱

位置と環境 黒田大塚古墳は、田原本町大字黒田に所在する西向きの前方後円墳である。本古墳は、弥生・中近世の黒田遺跡とも重複している。また、斜めに走行する筋道に面し、古代に創建されたと推定される法楽寺の寺域内に取り込まれている。北には島の山古墳を盟主とする三宅古墳群がある。

本古墳は、全長86m、埴丘長70m、後円部径40m、後円部高さ8.2mを測り、周囲に幅8mの周濠を有している。本来、二段築成の埴丘であったが、一段目は中近世の大溝によって削り取られている。

- 検出遺構**
- ・古墳時代：黒田大塚古墳の周濠
 - ・中世：大溝4条
 - ・近世：大溝1条、土坑2基

出土遺物 古墳周濠からは、弥生土器（後期後半）・円筒埴輪・朝顔形埴輪・鳥形木製品・須恵器が出土した。中世大溝からは、瓦器塊・土築器小皿・羽釜・束縛系須恵器・瓦などが出土した。これらは法楽寺関係の遺物であろう。

まとめ 今回の調査は、古墳の周濠の確認となった。残念ながら、周濠の幅は中近世の大溝に削られ、正確な規模は不明であるが、ほぼ8mになるであろう。周濠中央付近では、外側に向かって打ち込まれた柱があった。何らかの施設あるいは祭具を飾ったと考えられる。

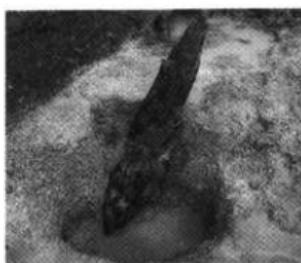
中近世の大溝は、これまでの調査の大溝にどれがつながるのかは今後の調査を必要とするが、古墳を取り巻くように掘削されているようである。東西に走行するSD-01の中世大溝は、法楽寺の前面の水路線上にあたることから寺域を区画する可能性がある。



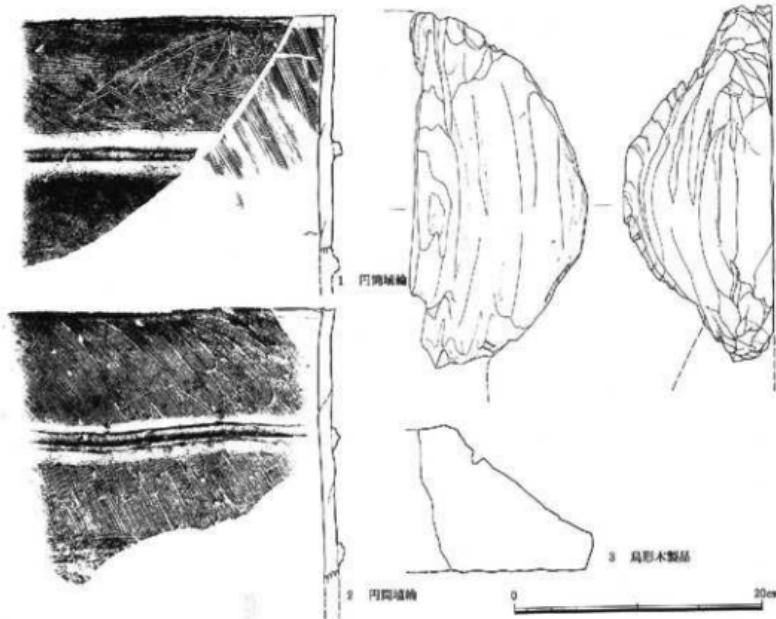
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 木柱検出状況



古墳周濠 にたつ木柱

黒田大塚古墳の前方部周濠の中央と思われる所で、斜め（南西側に傾く）に打ち込まれた大きな柱を検出した。この柱は周濠の外側に向かって突き立てられており、柱の太さ約22cm、長さ120cmを計る。周濠は水濠であったと考えられることから、築造時に柱が打ち込まれたと推定される。但し、先端は腐食しており、どのような形態であったか不明である。また、周濠の下層は、自然木等を多く含む植物腐食土層であり、鳥形木製品頭部や樋管状木製品、記号が描かれた円筒埴輪や朝顔形埴輪の大形破片が出土している。樋管状木製品は、内部が割り貫かれ栓をしていた。

この周濠の状況から、古墳築造数十年で周辺には木々が繁茂し、墳丘の崩壊が始まったことが推定される。周濠の上層は、おそらく西側に隣接する法楽寺が平安時代に建立された段階に古墳の削平が始まり、それに伴って周濠を埋められた土と考えられる。

Colum

10

黒田大塚古墳
第4次

(12) 小阪里中遺跡 第4次調査

所在地 田原本町大字小阪217-1他

調査面積 220m²

調査原因 貸事務所の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 960710～960723

遺物量 4箱

位置・環境 小阪里中遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で円墳・中近世屋敷跡などが検出されている。また、弥生時代中期の遺構も認められ、北側500mにある拠点集落唐古・鍵遺跡の分村が存在した可能性がある。

検出遺構 中世の遺構としては、中世素掘小溝の他に東西方向の大溝1条・小溝1条が検出されている。SD-56は調査区北側で検出された幅5m、深さ1mの大溝で、層序から再掘削されていることが判明した。当初の掘削に伴う遺物が少ないとめ掘削時期は不明であるが、再掘削された段階に14世紀後半の遺物が認められるため、鎌倉時代～室町時代ごろに機能していた溝と考えることができる。

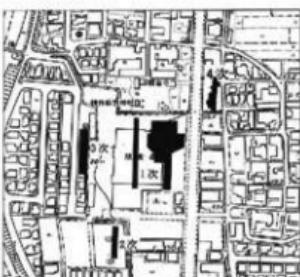
弥生時代～古墳時代の遺構としては、SD-101～105の5条の溝がある。古墳時代のSD-101は幅2.5m、深さ0.5mの北北東～南南西方向の溝である。

出土遺物 出土遺物の大半が古墳時代の遺物である。また、遺物包含層や古墳時代の遺構には弥生時代中期の土器が認められた。

SD-101からは朝顔形埴輪、円筒埴輪の破片が出土している。また、須恵器壺・甕の破片もみられた。ただし、埴輪等については周辺の古墳からの混入である可能性もある。

中世遺構に伴う遺物は少なく、若干の土師器・瓦器などが出土した程度である。

まとめ 今回の調査では中世人溝を検出することができたが、周囲では柱穴も希薄であり、遺物も少ないとから、居住区から離れた場所の区画溝であることが考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（北から）



3. 調査地全景（南から）

(13) 矢部南遺跡 第1次調査

所 在 地 田原本町大字矢部382-1西隣接地

調査面積 660m²

調査原因 水路改修

担当者 豆谷和之

調査期間 961118~961125

遺物量 1箱

位置・環境 矢部南遺跡はこれまで周知されていなかつた遺跡である。隣接する团栗山古墳からは、昭和11年の探土によって多数の副葬品が出土している。その築造年代は6世紀後半と推定される。他にも、团栗山古墳の北西約150mの地点には、平坦な島状の高まりがあり、高ツキ古墳と呼ばれている。周辺にはまだ古墳があったとの風聞もあり、一帯に古墳群が形成されていた可能性は極めて高い。今回、水路工事の計画をうけ、埋没古墳の有無確認を目的として調査を行った。

検出遺構 •古代～中世：河川跡1条

出土遺物 水田床土直下の灰色粘土層中から土師器や須恵器が出土している。中世の遺物包含層と考えられる。層の厚さは10cm程度と薄く、遺物量も少ない。二次堆積の可能性が強い。

調査区の北西側で検出した河川跡は、磨滅した土師器・須恵器や植物遺存体をわずかに含んでいた。古墳時代以降の流路と考えられる。注目すべきこととして、当初は地山と考えていた暗黃灰色粘土層から、サヌカイト製のスクレイバーが出土したことが挙げられる。外面の風化が著しく、旧石器の可能性もある。

まとめ 今回の調査では、当初期待された埋没古墳の検出はなく、また遺構も見当たらなかった。しかし、中世遺物包含層や自然流路には、古墳時代の遺物を若干含んでおり、周囲に関連する遺構があることを想定させた。

また、暗黃灰色粘土層中から単独出土したサヌカイト製スクレイバーは、旧石器の可能性もある。田原本町内でも標高が高い矢部地区周辺の調査における類例の増加を待ちたい。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査風景（北から）



3. 団栗山古墳（西から）

(14) 平野氏陣屋跡 第9次調査

所在地 田原本町787-4

調査面積 70m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 藤田三郎

調査期間 970225~970314

遺物量 50箱

位置と環境 平野氏陣屋跡は、寺川の西側に立地し、田原本町小字郭内を中心に構成された陣屋や侍屋敷で構成される。下層では、中世の「田原本氏」(奥城屋敷)居館が重複している。また、本遺跡の西側には寺内町が形成され、南側には中世からの楽田寺がある。

平野氏陣屋跡の調査は主に遺跡の北半においておこなわれ、陣屋を区画する大溝などが検出されている。今回の調査地は陣屋の南にあたる。

検出遺構

- 室町時代：小溝1条、落ち込み
- 江戸～明治時代：大溝1条、柱穴

江戸時代の大溝は、調査区の西端で検出した南北方向の大溝で、道路側溝と考えられる。この大溝の東側には、柱穴が溝に並行しており、塀が存在した可能性が高い。

出土遺物 室町時代の落ち込みから、多量の土師器小皿と瓦器塊約1000点、少量の土師器羽釜と東播系こね鉢、瓦質擂鉢等が出土し、良好なセット関係が明らかになった。

まとめ 平野氏陣屋跡の調査としては今回の調査地が最も南にあたる。検出された江戸時代の遺構は陣屋の南に形成された町屋と想定される。また、室町時代の遺構面との間には、約0.6mの客土的な堆積土層が存在することから、この一角が陣屋成立後に新たに造られた町屋である可能性が高い。

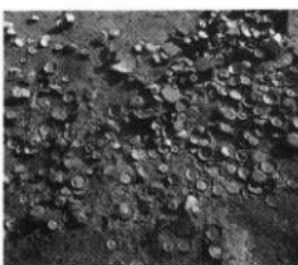
室町時代の落ち込みと考えられる大規模な浅い遺構では、多量の遺物が出土した。本地の南側には、法楽寺が存在することから、本寺に伴う何らかの施設と祭礼に伴う遺物群と考えられる。



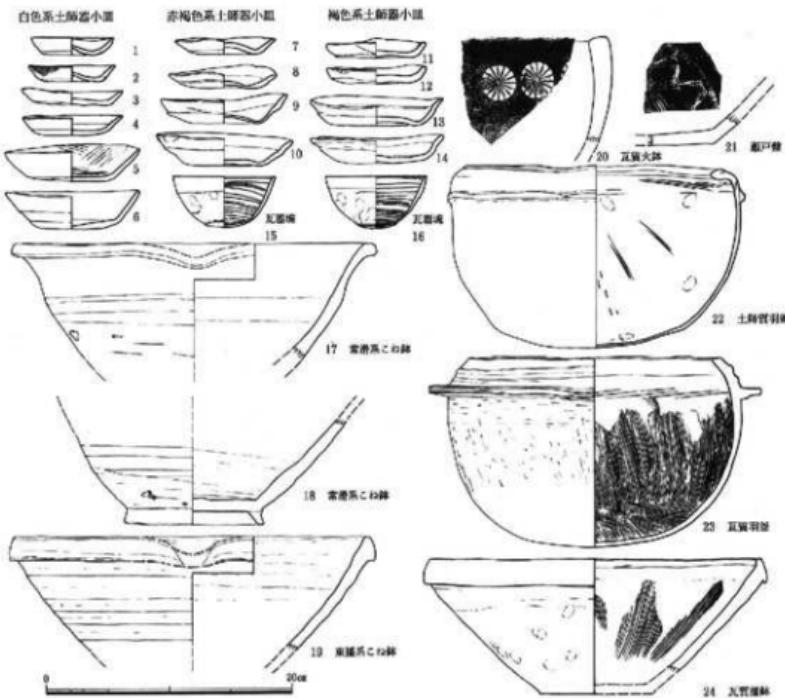
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 落ち込み状遺構 (南東から)



3. 落ち込み状遺構 遺物出土状況



多量に棄てられた 土師皿と瓦器塊

室町時代の落ち込みと考えられる大規模な浅い造構の上層から多量の完形土器が出土した。土器の種類は土師器小皿と瓦器塊が大半で、わずかに土師質・瓦質羽釜・瓦質播鉢・火鉢、東播系こね鉢、常滑系こね鉢で構成される良好な一括資料と考えられる。

土師器の小皿は、胎土や色調、手法から3つのタイプがあり、それらはそれぞれ大小の大きさがある。赤褐色系（7～10）と褐色系（11～14）は、胎土に砂粒を混ぜるが、赤褐色系は微細な雲母を含む。いずれも強いヨコナデを口縁部に施しているため、段を有している。底部は、やや上げ底（へそ皿）気味であるが、赤褐色系のほうがその傾向は強い。白色系（1～6）は、砂粒が混在するが概して精良な胎土である。ヨコナデは強くなく、口縁部は薄い。瓦器塊（15・16）は半球形の形態で、内面に輪状の暗文がめぐる。瓦質播鉢（24）は、口縁部が外側に肥厚しており東播系鉢を模倣したものであろうか。

Colum

11

平野氏陣屋跡
第9次

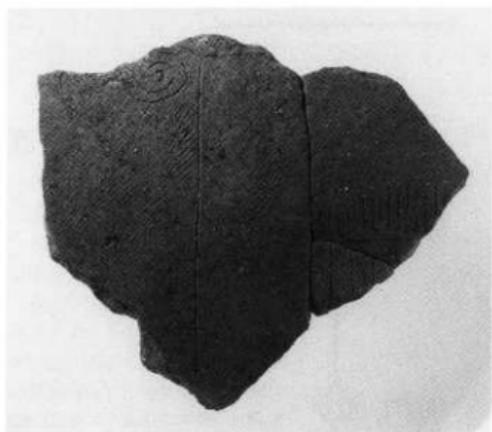
（） 潟巻き飾りのある建物 （）



清水廐遺跡 第2次
SK-118 出土
「渦巻き飾りと人」



唐古・廐遺跡 第61次
SD-102B 出土
「多重の渦巻き飾り」



八尾九原遺跡 第1次
SK-201 出土
「下向きの渦巻き飾り」

III. 試掘調査・立会調査の概要

本年度の試掘調査と立会調査は、22件を数える（第3・4表）。

薬王寺東遺跡では2カ所の試掘が行われた（B・F）。弥生時代～古墳時代前期の河道が検出されたことから、調査地周辺は自然河川の氾濫原であった可能性がある。

羽子田遺跡では4カ所の試掘が行われた。このうち、（E）は調査日数3日、調査面積約50m²の試掘で、中世大溝（S D-01）や中世井戸（S E-01）を検出するなどの成果があった。大溝は東西方向に軸をもち、北側にある現在の道路と並行する。また、大溝の南側では、同時期かは問題が残されるが、井戸や小溝を検出している。この状況からすれば、大溝はそれよりも南側にあった聚落地、あるいは集落を区画する大溝の可能性が高い。また、（D）では弥生時代中期の土坑が検出されたほか、（A）でも弥生時代末の落ち込みが検出された。小規模な試掘調査の積み重ねにより羽子田遺跡の全貌を知るための手掛かりが得られたといえよう。



田原本町の道路と試掘調査・立会調査地点

第3表 1996年度試掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	調査番号 (田教文)	進退日	調査日	内 容
A	羽子田遺跡	田原本町234-7	中西秀和	店舗付共同住宅の建築	367	96. 2. 5	96. 5. 21	南北10m、幅2mの試掘坑を設定。弥生時代末の落ち込み状の堆積を検出。
B	薬王寺東遺跡 (荒道)	田原本町薬王寺 494-1	池田幸子 外5名	分譲住宅の建築	27	96. 4. 24	96. 5. 27	1.5×2mの試掘坑を3ヶ所設定。古墳時代～飛鳥時代の川跡、弥生時代の川跡を検出。
C	羽子田遺跡	田原本町365-4	谷口定雄	個人住宅の建築	54	96. 5. 10	96. 7. 23	駐車場予定地で幅0.8m、長さ4mの試掘坑を設定。中世ごろの河道堆積内。
D	羽子田遺跡	田原本町356-1	福西 稔	個人住宅の建築	436	96. 3. 29	96. 7. 23	駐車場予定地で幅0.8m、長さ4mの試掘坑を設定。近世末ごろの構と弥生時代中期後半の土坑を検出。
E	羽子田遺跡	田原本町342	寺田君子	共同住宅の建築	201	96. 10. 14	96. 10. 29 ~10. 31	幅1.4m、東西25mの試掘溝、幅1m、南北10mの試掘溝を設定。東西方向の大溝や井戸を検出。
F	薬王寺東遺跡	田原本町薬王寺86	中川忠夫	賃貸住宅の建築	223	96. 10. 28	97. 1. 30	3×1.5mの試掘坑を3ヵ所、11×1.5mの試掘坑を1ヵ所設定。弥生時代末～布雷期の河道を検出。

第4表 1996年度立会調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	調査番号 (田教文)	進退日	調査日	内 容
1	保津・宮古遺跡	田原本町八路 503-2他	田中友弘	個人住宅の建築	387	96. 2. 26	96. 4. 15	基礎掘削部分で立会。堀削は極めて浅く、遺構の有無は不明。
2	保津・宮古遺跡	田原本町宮古 12-1 南側水路	田原本町長	道路建設	378	96. 2. 19	96. 4. 23 96. 5. 2	水路工事部分で立会。古墳時代の土坑・弥生以前の河道等を検出。
3	筋道	田原本薬王寺 132-18	山口久良	個人住宅の建築	418	96. 3. 25	96. 5. 7	排水用パイプ埋設部分で立会。土基が厚く、遺構面まで掘削は及んでいない。
4	千代遺跡	田原本町千代 863-1他	山口糸枝	水路改修	361	96. 2. 21	96. 5. 28	地盤改良のため深さ1.1mまで掘削。遺物包含層等は認められない。
5	中ツ道	田原本町 為川北方1-2他	奈良県自動車 車体整備協同組合	会館建築	159	96. 8. 26	96. 9. 9 ~9. 10	客土が約0.9m堆積するため、遺構面に掘削が及んでいない。
6	西竹田遺跡	田原本町西竹田 36-1 西側水路	田原本町長	水路工事	205	96. 10. 16	96. 10. 16	水路内での掘削時に立会。すでに機械をうちた後で、遺構・遺物は確認されず。
7	中ツ道	田原本町為川南方 95-1他	本郷毅彦	個人住宅の建築	142	96. 7. 30	96. 10. 28	ボーリングしながらコンクリートを注入する改良工事であったため、遺構の有無は確認できなかった。
8	保津・宮古 遺跡周辺	田原本町保津 61東側水路	田原本町長	水路工事	207	96. 10. 16	96. 11. 11	水路工事掘削部分で立会。遺構・遺物はみられない。

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進退番号 (田文)	進退日	調査日	内 容
9	清水風遺跡 馬辺地	田原本町唐古 296-1他	奈良トヨタ	自動車修理工場の建設			96. 11. 11	1mの掘削があるが、客土内にとどまる。
10	唐古・鍵遺跡	田原本町唐古 201南側道路他	田原本町長	水路工事	206	96. 10. 16	96. 11. 12 ~11. 22	水路西端の集水部掘削時に立会。北方砂層の堆積を確認。他の水路部分の堆積は堤防盛土内にとどまる。
11	矢部南遺跡	田原本町綾田 307-4 西側道路	田原本町長	道路建設	258	96. 11. 28	96. 12. 10	擁壁部分で立会。深さ1.2m前後の面前で、遺構・遺物ともに確認されず。
12	遺物散布地 (県遺跡地図 11-C-047)	田原本町宮森 100-125	三宅 智	個人住宅の建築	272	96. 12. 13	97. 3. 10	地盤改良工事時に立会。客土が1.2mあり、工事は旧水田面まで及ばない。
13	遺物散布地 (県遺跡地図 11-C-047)	田原本町新木 1-139	西井 勲	個人住宅の建築	271	96. 12. 10	97. 3. 12	基礎掘削部分で立会。深さ1mの掘削は客土内にとどめた。
14	保津・ 宮古遺跡	田原本町宮古 345-1南側水路他	奈良県	水路工事			97. 3. 14	水路工事部分で立会。深さ0.7mの掘削。中世の遺物少量が出土しているが、遺構は確認されず。
15	千代遺跡	田原本町千代 1107-3他	北林光男	個人住宅の建築	181	96. 9. 24	97. 3. 26	基礎掘削時に立会。深さ0.2mと浅く、客土内にとどまる。
16	下ツ道	田原本町坂手 596-3	㈱ジョーフォー ボーリング	分譲住宅の建築	344	97. 3. 11	97. 3. 28	擁壁部分での立会。水田面より深さ0.2mの掘削で、遺構面には達していない。

田原本町埋蔵文化財調査年報 6
1996年度

平成9年3月31日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 明新印刷株式会社

